長崎原爆被爆者のセルフスティグマの様相

吉田恵理子・永峯卓哉

長崎県立大学看護栄養学部看護学科

Aspects of Self-Stigma among Nagasaki Atomic bomb Survivors

Eriko YOSHIDA, Takuya NAGAMINE

Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition,
University of Nagasaki, Siebold

要　旨

本研究の目的は、長崎原爆被爆者のセルフスティグマの様相を明らかにすることである。長崎原爆被爆高齢者５名を研究参加者とし、theme life-story 法を用いたライフストーリー・インタビューを実施し内容分析を行った。長崎原爆被爆者のセルフスティグマは、【被爆者になった自分】【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】【家族への影響の根源としての自分】【自己否定】の５つで形成された。長崎原爆被爆者は、「あの時から、私は被爆者になった」と原爆による被爆によって**【被爆者になった自分】**を根底とし、被爆者であることに起因した社会的スティグマによる仕事や結婚への影響といった差別体験をくり返しうけることにより、**【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】【家族への影響の根源としての自分】**をセルフスティグマとして体験していた。また、それらのセルフスティグマを持つことによって「被爆者である自分には価値がないと思ったこともある」と**【自己否定】**の感情も抱いていたことが長崎原爆被爆者のセルフスティグマのあり様であることが示唆された。

キーワード：セルフスティグマ、長崎原爆被爆高齢者、被爆体験

所属：長崎県立大学看護栄養学部看護学科　Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition, University of Nagasaki, Siebold

はじめに

本研究は、長崎原爆被爆体験者（以下、原爆被爆者）のセルフスティグマの様相を明らかにすることを目的とした。

1945年（昭和20年）8月6日に広島、9日に長崎に原子爆弾（以下、原爆）が投下され、多くの人が犠牲となった。1957年（昭和32年）に原子爆弾被爆者の医療等に関する法律が施行され、被爆者へ「被爆者健康手帳（被爆者手帳）」が交付されるようになった。被爆者手帳を持つ被爆者は、2024年3月末現在、10万6825人（2023年度3月末より6824人減）、平均年齢は85.58歳となり高齢化が進んでいる[1)]。

これまで原爆被害に関する研究の多くは、医学的視点から多く行われ、原爆による被ばくとがんの関連や健康状態、心理状態について明らかにされている[2)～8)]。

スティグマは、日本語での「偏見」や「差別」を意味する。原爆被爆者に対する偏見や差別は、原爆被害に関する研究の中で偏見や差別について記載されており[9)～13)]、原爆被爆者は被爆体験後、くらしの中で様々なスティグマを感じながら生きていた。

スティグマには、社会的スティグマとセルフスティグマが含まれるとされている。セルフスティグマに関する研究は、精神疾患・障害に対し多く行われており[14)～18)]、セルフスティグマは、回復やQuality of Lifeなどに大きな影響を及ぼしているとされている。しかし、原爆被爆者を対象とした研究において、未だ原爆被爆者が抱えて生きてきたセルフスティグマを探究した研究は行われていない。

用語の定義

長崎原爆被爆者：長崎に投下された原爆による被爆体験者と定義した。

セルフスティグマ：長崎原爆被爆体験者が自分自身に抱いている偏見と定義した。

研究方法

1.　研究参加者

研究参加者は、機縁法により紹介を受けた1945年に落下された長崎原爆により被爆体験をしたチャイルドサバイバーである高齢者で、過去に、被爆体験について語った経験のない者とした。

2.　調査期間

2020年6月から2023年3月

3.　データ収集方法

白水[19)]が提唱する、theme life-story法を用いたライフストーリー・インタビューを実施した。具体的には参加者に「被爆後、ご自身に対してどのような思いを抱いて生きてこられましたか」という問いかけをし、長崎原爆の被爆後、生きてきた中で参加者が感じていた自分自身に対する見方、感情について自由に語ってもらった。

語りの内容は、研究参加者の了解を得てICレコーダに録音した。面接場所は、研究参加者の自宅、公民館など公共施設の個室、研究者の所属する大学の研究室とした。

4.　分析方法

語りの内容は、参加者の語りをそのまま書き写す「対話引用方式」を用いて、逐語録を作成し、『セルフスティグマ』について語られた部分を抽出した。分析は、Berelson B.[20)]の内容分析の手法を用いた。具体的には、逐語録を繰り返し熟読し、長崎原爆により被爆体験をしたチャイルドサバイバーである高齢者が、自分自身に対し抱いている偏見、つまり『セルフスティグマ』について語った語りを抜き出し、コードとした。次に、コードを内容の類似性・相違性を検討しながらカテゴリを形成し、形成したカテゴリに対し、内容を反映する命名を行った。さらに、カテゴリをもとに原爆被爆者の『セルフスティグマ』の体験を解釈し、アウトラインを提示した。

分析の過程では、共同研究者と繰り返し検討し、カテゴリを形成しアウトラインを描き出した時点で研究参加者に内容の確認を行い、加筆、修正を行った。

5.　倫理的配慮

参加者に研究目的、方法、インタビュー内容、研究参加に伴う心理的負担の可能性、参加・辞退の自由、研究成果の公表、データの保管、研究終了後のデータの取り扱いについて文書と口

頭で説明し、署名による同意を得た。

面接は、参加者の体調やプライバシー、新型コロナウイルス感染対策を十分に配慮したうえで実施した。

結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は5名であった。年齢は84歳から89歳(被爆当時8歳から13歳)、性別は男性3名、女性2名であった。インタビュー時間は計485分（58分から126分）であった（表1)。

表1. 研究参加者の概要

	年齢（被爆時）	性別	面接時間（延べ）
A氏	84（8）	女	58分
B氏	86（10）	男	106分
C氏	84（8）	男	95分
D氏	89（13）	女	126分
E氏	85（9）	男	100分

2. 原爆被爆者のセルフスティグマ

分析の結果、原爆被爆者のセルフスティグマは389コードから、【被爆者になった自分】【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】【家族への影響の根源としての自分】【自己否定】の5つのカテゴリが形成された。

以下それぞれのカテゴリごとに特徴的な語りの内容を示す。

1)【被爆者になった自分】

原爆被爆者が語った、【被爆者になった自分】に関連する語りは、「原爆の直前までね、縁側でシミーズ（肌着）1枚で遊んでたんですよ。それなのに一瞬でね、あの一瞬で、あの時から、私は被爆者になった」「原爆にあって最初は、血だらけの人を見て怖いとか、道端で倒れている人や焼け焦げた人とも物ともつかない塊をみて、恐ろしくてたまらなかったけど、怖いとか悲しいとかいう感情は湧かなくなった。（中略）いつの間にか『被爆者』って呼ばれるようになって、ああ、あの時死ななかっただけで、焼け焦げた人と同じだって！」などであった。

2)【自己実現への足かせ】

原爆被爆者が語った、【自己実現への足かせ】に関連する語りは、「被爆者であることは、良いことは何もない。親から、お前は普通には結婚ができないんだからと言われ続けた。被爆者っていうだけで、そのままの自分であることが許されない時代だった」「『被爆者』って言われたくなかったから、ずっと原爆にあったことは、隠して生きてきた」「原爆の後は、とにかく食うことがやっとの生活でしたから、今なら考えられんだろうけど、あれがしたいとか、これがほしいとか、そんなことを言っている場合じゃなかった。私の実家は跡形もなくなったから、親戚の家で肩身がせまくて、叩かれたりしよったけど、生きていくためにはどうのこうのっていっとられんかった」などであった。

3)【諦めざるを得ない普通の人生】

原爆被爆者が語った、【諦めざるを得ない普通の人生】に関連する語りは、「長崎にいた時はよかったんですよ。周りがみんな被爆者だからね。でも、就職で県外に行ったら『そんなピカの火傷のあるものは雇えない』と言われてやりたい仕事も被爆後のケロイドのためできなかった。自分のやりたいこと（仕事）をやるっていう普通の人生を諦めた」「結婚して子どもができんかったら、『あんたは被爆者手帳をもっとるやろ。だけん子どもができん』って言われて結局離縁された。今ならそんなことはなかとやろうけどね。再婚して子どももできたから、原爆との関係じゃなかったと思うけど。被爆者っていうだけでそがん目で見られて、普通の人生じゃなかったと思う」などであった。

4)【家族への影響の根源としての自分】

原爆被爆者が語った、【家族への影響の根源としての自分】に関連する語りは、「子どもの将来への影響を考え、被爆者であることを子どもには明かせなかった」「子どもが若くしてがんになって、私が原爆にあったせいかとずっと気に病んでいた」「妹が嫁いだが、その時に長崎でピカ（原爆）にあっているけど大丈夫かといったことを先方から聞かれたことがあって、そんなこともあったから、娘が結婚する時にそれが障害になるようなことになったらかわいそうだと思って、被爆者手帳は申請していなかった」「子

どもができた時はうれしかったが、放射能の子どもへの影響も言われていたから、大丈夫だろうという気持ちと、もし子どもに影響があったら申し訳ないなという気持ちだった。妻には（そういった気持ちがあることは）話さなかった。子どもが生まれた時は、特に障害がなかったのでホッとした。遺伝は眼に見えないから、孫が生まれる時にも、放射能の影響がないといいが…と思わないでもなかった」などであった。

5)【自己否定】

原爆被爆者が語った、【自己否定】に関連する語りは、「あの時死んでしまっておけば…何で兄も母も死んで自分だけが生き残ったんだろう…。私の心の深いところには、原爆のあの悲惨な状況の中で生かされたことに何の意味があったんだろうと、あの時私が生き残ったことに意味があったのか？この歳になっても答えは見つからん」「人のうわさや目って本当にこわい。被爆者であることを理由に嫌な目にもあって、被爆者である自分には価値がないと思ったこともある」などであった。

3. 長崎原爆被爆者のセルフスティグマの様相

原爆被爆者のセルフスティグマのアウトラインを示す。

原爆被爆者は、「あの時から、私は被爆者になった」と原爆による被爆によって【被爆者になった自分】を根底とし、被爆者であることに起因した社会的スティグマによる仕事や結婚への影響といった差別体験をくり返しうけることにより、「被爆者であることは、良いことは何もない。親から、お前は普通には結婚ができないんだからと言われ続けた」「やりたい仕事も被爆後のケロイドのためできなかった。自分のやりたいこと（仕事）をやるっていう普通の人生を諦めた」「子どもの将来への影響を考え、被爆者であることを子どもには明かせなかった」というように【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】【家族への影響の根源としての自分】をセルフスティグマとして体験していた。また、それらのセルフスティグマを持つことによって「あの時、私が生き残ったことに意味があったのか」「被爆者である自分には価値がないと思ったこともある」と【自己否定】の感情も抱いていた。

考察

原爆被爆者のセルフスティグマは【被爆者になった自分】【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】【家族への影響の根源としての自分】【自己否定】であった。

原爆被爆者は、「あの時から、私は被爆者になった」と原爆での被爆によって【被爆者になった自分】について「なった」ということばを用いて表現していた。「なった」とは、チャイルドサバイバーである高齢被爆者が、被爆したあの日を境に、自分自身を被爆者であると意味づけたということであろう。このように、被爆の体験そのものもセルフスティグマにつながっていると考える。一方で、「妹が嫁いだが、その時に長崎でピカ（原爆）にあっているけど大丈夫かといったことを先方から聞かれたことがあって、そんなこともあったから、娘が結婚する時にそれが障害になるようなことになったらかわいそうだと思って、被爆者手帳は申請していなかった」の語りにも見られたように、被爆者手帳を申請するということは、自分が被爆者であるということを自他ともに認めるということであり、被爆者手帳を取得することで社会的に偏見を受けるのではないかという意識が働いたと考える。このことは、横山が、精神障害者のセルフスティグマに関する研究においてセルフスティグマの形成要因は“偏見を受けている意識”や“精神障害者への否定的認識”である[21]と述べているように、本研究においても、原爆被爆者のセルフスティグマは、“偏見を受けている意識”や“原爆被爆者への否定的認識”が要因となっていると考える。

また、長崎原爆被爆者は、セルフスティグマについて【自己実現への足かせ】【諦めざるを得ない普通の人生】といったセルフスティグマを持つことによって【自己否定】の感情も抱いていた。

アブラハム・マズローは、人間の基本的な欲求には、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求、の 5 つの欲求があるとし、その中でも、自己実現の欲求は最高次の欲求として位置づけている[22]。原爆被爆者が、「原爆の後は、とにかく食うことがやっとの生活でしたから、今なら考えられんだろうけど、あれがしたいとか、これがほしいとか、

そんなことを言っている場合じゃなかった。私の実家は跡形もなくなったから、親戚の家で肩身がせまくて、叩かれたりしよったけど、生きていくためにはどうのこうのっていっとられんかった」と語ったように、被爆直後は、食べることや住居にも不自由した人が多く存在し、基本的な欲求である、生理的欲求、安全の欲求も十分に満たすことができない状況があったと考える。また山田が、統合失調症患者のセルフスティグマと自尊感情の関連について、差別体験は、セルフスティグマに弱く影響を与え、差別体験があるとセルフスティグマは高くなる傾向があった[23]と述べているように、原爆被爆者も「被爆者であることは、良いことは何もない。親から、お前は普通には結婚ができないんだからと言われ続けた。被爆者っていうだけで、そのままの自分であることが許されない時代だった」「『被爆者』って言われたくなかったから、ずっと原爆にあったことは、隠して生きてきた」に示されるように、社会的スティグマによる差別体験が原爆被爆者のセルフスティグマに連関していたのではないだろうか。

以上のことより、原爆被爆者のセルフスティグマは、被爆の仕事や結婚への影響という社会的スティグマに起因し、被爆者になった自分を、普通の人生や自己実現をあきらめざるを得ないものとして捉え、自身の生を無意味・無価値なものとして自己否定することにつながっていたと考える。

研究の限界と課題

本研究は、長崎原爆被爆者のセルフスティグマの様相について明らかにしたものであり、高齢となった原爆被爆者を支援するうえで、原爆被爆者が抱えて生きてきた、セルフスティグマを理解することは重要であり、意義ある研究である。しかし、本研究においては、その発生要因は不明である。支援につなげるためにも、なぜ、どのように原爆被爆者がセルフスティグマを抱くに至ったのかを検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただき、自身の体験をお話いただいた研究参加者の皆様に深謝申し上げます。

利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反関連事項はなし。

本研究の一部は、長崎県立大学学長裁量研究費の助成を受け、第44回日本看護科学学会学術集会にて発表を行った。

引用文献

1) 厚生労働省．被爆者数・平均年齢．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26531.html（参照 2024-11-20）

2) Fujimaru Kingo,Sugiyama Aya,Akita Tomoyuki et al（2021）Screening for M-proteinemia consisting of monoclonal gammopathy of undetermined significance and multiple myeloma for 30 years among atomic bomb survivors in Hiroshima, International Journal of Hematology, 113（4），576-585.

3) 神谷研二（2021）．広島の経験を福島へ、放射線発がんリスクと小児甲状腺がん．日本小児血液・がん学会雑誌，57（5）,329-340.

4) 三根眞理子，横田賢一，河野友子（2020）．原爆被爆者定期健診の現状．長崎医学会雑誌，95，239-245.

5) 縮輪哲生，相川忠臣，鳥山史他（2018）．長崎原爆被爆者の被ばくによる日光角化症の発症について．長崎医学会雑誌，93，355-360.

6) 近藤久義，横田賢一,三根眞理子，他（2018）．長崎市原爆被爆者における既往症有病率と距離との関連．長崎医学会雑誌，93，317-320.

7) 山下俊一（2017）．放射線と健康影響，臨床環境医学．26（1）,1-6.

8) 一ノ瀬仁志，中根秀之 , 木下裕久（2006）．長崎原爆体験者の心身の健康に関する調査研究．長崎医学会雑誌，81，222-225.

9) 青木秀男（2015）．原爆と被差別部落－被害の構造的差異をめぐって－．社会学評論 ,66（1）,89-104.

10) 森顕登（2008）．早稲田社会宅総合研究別冊「2008年度学生論文集」,29-41.

11) 川本 寛之 , 川野 徳幸(2015)．原爆被爆者の「思い」についての一考察―憎しみと責任論の視点から―．広島平和科学，37 ,57-68.

12) 松尾順子（2010）．体験を語り始める．質的心理学

研究，9，6-24.
13) 金吉晴，川村則行，堤敦朗，他 (2009)．第 104 回日本精神神経学会総会シンポジウム，精神経誌，111 (4) 400-404.
14) 田中悟朗 (2008). 精神障害を持つ人々のセルフスティグマの克服．人間科学共生社会学，6，47-58.
15) 吉井初美 (2016)．精神障害者のセルフスティグマ低減を目的とした介入研究課題：レビュー．日本精神保健看護学会誌，25 (1) , 91-98.
16) 西澤果歩，川村晃右 (2023)．統合失調症者のセルフスティグマにつながる経験とその対処のために求めていることに関する文献検討．日本保健医療行動科学会雑誌，38 (2)，90-97.
17) 嶋本麻由，廣島麻揚 (2013)．精神障害者が持つセルフスティグマを増強させる要因と軽減させる要因．京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学，9，11-19.
18) 髙田瑞希 , 長谷川晃 (2021)．精神障害者に対するスティグマを規定する要因－精神障害者との接触体験と 4 つの個人差要因の影響－．東海学院大学紀要，15，1-11.
http://purl.org/coar/resource_type/c_6501
19) 白水繁彦 (2016)．女性が「自立」するということライフストーリーから読み解く高学歴女性の適応のストラテジー．Journal of global media studies , 17・18，55-67.
20) Berelson, B.(著)，稲葉三千男, 金圭煥(訳) (1957)．内容分析，48-70，みすず書房，東京.
21) 横山和樹，森元隆文，竹田里江，他 (2011)．精神障害者におけるセルフスティグマと対処様式との関連 . 北海道作業療法 ,28,115.
22) マズロー，A.H.（小口忠彦・監訳）(1971)．人間性の心理学　産業能率大学出版部〔Maslow, A.H. (1954) .Motivation and personality. Harper & Row.〕
23) 山田光子 (2015)．統合失調症患者のセルフスティグマが自尊感情に与える影響．日本看護研究学会雑誌，38 (1) ,85-91.